様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月　２ 日現在

機関番号：３２６８０
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１３０７０

研究課題名（和文）初年次アカデミック・ライティングプログラムにおける効果的な評価システムの構築

研究課題名（英文）Creating an Effective Assessment System for First-Year Academic Writing Programs

研究代表者
藤浦　五月（Fujiura, Satsuki）

武蔵野大学・グローバル学部・准教授

研究者番号：３０８０３６６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、アカデミック・ライティングプログラムにおいて、調査に基づいた評価表（ルーブリック）を作成し、ルーブリックの真の有効性を検証することである。本研究により、複数教員が関わる大型プログラムで使用可能なルーブリックと、評価ツール開発のためのガイド提供が可能となる。目的遂行のため、次の３点に分けて研究を行った。①評価ツール開発の基礎として、教員間の評価の差異について明らかにした。②差異調査の結果と評価記述に関する調査に基づき、評価結果の差異がより少なく、学生・教員にわかりやすい評価ツールを開発した。③完成した評価ツールを利用して、学生の評価傾向調査を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
約9割の大学が初年次教育にアカデミック・ライティングプログラムを取り入れており、レポート・ライティングに関わるスキルを専門を学ぶ上での基礎的なスキルとして位置付けていることが窺える。一方で、学科を越えて指標となるレポートライティングのための評価手法・ツール・評価ツール開発ガイドは提示されていない。本研究は、学科を越えて約2,000名が受講するプログラムにおける評価ツール（ルーブリック）を開発する研究プログラムであり、本研究で得られた知見は、他の実践現場で評価ツールを開発するための基礎的な資料として今後活用されることが期待できる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to develop a research-based rubric for academic writing programs and verify the effectiveness of the rubric. This research will enable us to provide a rubric that can be used in large programs involving multiple faculty members and a guide for the development of assessment tools. In order to accomplish the objectives, the study was divided into the following three sections. (1) As a basis for the development of evaluation tools, we clarified the differences in evaluations among teachers. (2) Based on the results of the differences and the survey on evaluation descriptions, we developed an evaluation tool with fewer differences in evaluation results and easier to understand for students and teachers. (3) Using the evaluation tool, we conducted a survey of students' evaluation inclinations.

研究分野：日本語教育

キーワード：レポート・ライティング　評価　ルーブリック　アカデミック・ライティング　初年次教育　教材開発　カリキュラム開発

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究開始当初直近の文科省（平成 28 年度）の調査によると、調査に回答した大学のうち、89.8%の大学が初年次教育プログラムにおいてアカデミック・ライティングに関する授業を実施していた。令和 2 年度の同調査によると、91.9%の大学が実施しており、依然として教育の必要性の高さが窺える。当時は、ルーブリックの使用はまだ普及しておらず、学部段階において、いつ部の科目をルーブリックにより明示している大学は僅か 16%にとどまっていた。

研究代表者は、考える力と書く力を同時に育成するためには、見本レポートの型の習得を目指しつつもテーマを自ら考え資料を収集する過程を組み込んだプロセスライティングが効果的であると考えた。そこで、他の研究者とともにプロセスライティングのための教材を開発し、実践を重ねてきた。この実践は、教材『大学生のための表現力トレーニング あしか： アイデアをもって社会について考える（レポート・論文編）』（宇野聖子・藤浦五月 2016, ココ出版）として出版されている。しかしながら、本実践・本教材は評価方法については初年次教育のような大型カリキュラムでの使用は想定しておらず、同一授業を持つ複数教員の評価実態について把握できておらず、また、そのような状況で活用できる評価ツールが提供できていなかった。本実践の着想や構成は高い評価を得ている反面、初年次教育という多くの学生・教員が関わる運営の評価については未だ議論・改善の余地がある状況であった。

そこで代表者は、多くの学生・教員が関わる初年次教育実践において、どのような評価表・評価方法、運用が相応しいか、ルーブリック制作と実践を通してその有効性と開発プロセス・運用方法を具体的に示す必要性を感じた。

２．研究の目的

上記背景と問題意識に基づき、本研究の目的を、教員・学生双方の評価傾向を探り、学生が自ら学べるより良い評価ツールを開発することとした。初年次プロセス・ライティング授業におけるルーブリック評価表活用実態を示すとともに、ルーブリック評価表を用いる意義を明らかにする。そのために、本調査では、以下の設問を設けた。

（設問 1）ルーブリックを用いた評価において、教員間の評価差異はあるか。
　　あるとすればどのような傾向があるか。
（設問 2）教員・学生ともに評価差異を少なくするには、どのような記述が考えられるか
（設問 3）評価表を用いた学生同士の活動において、学生の評価にはどのような傾向があるか。
　　どのようなコメント傾向があるか。

３．研究の方法

教員間の評価差異や困難点に関する調査では、３本のレポート（匿名、採点者初見）を共通のルーブリックを用いて 7 名の教員が採点した結果を検証した。また、評価記述改善ポイントを探るために、新たに担当教員 12 名に旧ルーブリックの各項目について、「採点しやすい」と感じる程度を 1-5 の尺度で回答、自由欄に評価尺度選択理由や記述追加・記述改善について自由に回答をしてもらった。

学生の評価・コメント傾向に関する調査は、新型コロナウィルス感染症の影響で対面で行うことが難しく、予定を変更してオンラインで行われた。１グループ 50 名程度募集した。参加希望日時を選択する形式で行ったところ、グループ１・グループ 2 も 46 名ずつ集まった。データ収集後のデータを確認したところ、グループ 2 の協力者 2 名の評価表および手続きに不備があったため、対象データは、グループ１は 46 名分、グループ 2 は 44 名分となった。調査協力者には、本調査がレポートを評価する調査であることを伝え、事前準備として評価対象となるレポートを読んできてもらった。対象となるレポートは両グループ同じもので、調査協力者全員が初見である。評価対象レポートは、本学の初年次のレポート執筆の授業で求められている課題と同じ課題が想定されていることを伝えた。採点対象となったレポートは、藤浦ほか（2018）で行った教員間の評価差異を調査した際にも使用したものであり、教員間でも評価差異が大きく、かつ、資料や形式といった多様なポイントで評価差異が発生していたレポートである。字数は 2,020 字である。グループごとにオンライン上で集まり評価表 A（グループ 1）または評価表 B（グループ 2）を用いて評価・コメントをしてもらった。評価表 A は、4 段階（3 点、2 点、1 点、0 点）をチェックするものである。評価表 B も 4 段階であるが、ルーブリック形式であり、評価だけでなくその理由もチェックする。

どちらの評価表もコメント欄がついており、「A さんのレポートについて、読んでいて感じた疑問点やもっと知りたいと感じたことを書いてください」という指示と、「A さんのレポートをより良くするためにアドバイスをお願いします」という指示の欄を設けた。オンライン上での採点の取り組みの様子がわかるようにカメラオンでの参加を依頼し、その様子は調査アシスタント（2 名）がチェックを行った。カメラオンについては、調査協力募集時に明記し、事前に通達している。両グループとも、全体の協力時間は 60 分で依頼した。アドバイスの記入まで終わった時点で、時刻を報告してもらい評価表チェックとアドバイス記述が終了するまでのどの程度の時間がかかったかを調べた。

４．研究成果

(A)　教員同士の評価差異

教員のルーブリック評価調査をまとめ分析した結果、形式面よりも内容面の方が差が大きかった。また、得点の高いレポートの方が低いレポートよりも教員間の評価差は小さかった。項目別にみると、形式やマナーよりも内容面にズレが生じる傾向にあった。内容面は全体にわたりズレがあるのに対し、形式では、ズレの生じやすさが項目によって異なり、本調査では、参考文献の書き方についての評価のズレが大きかった（藤浦・宇野・小針・坂井・柴田・服部・中川・長松谷 2018）。

(B)　評価記述

評価記述採点のしやすさについては、1-5 段階のうち、形式面は全て 4 点台であった。しかし同じ形式面に属する項目であっても書式に注目すると、点数のばらつき（標準偏差 1.15）が見られ、教員側の感覚の違いがあった。2018 年の調査と 2020 年の調査を見ると、評価のズレがあるところほど採点のしにくさを感じているかというと、そのような関係性は見出せなかった。項目ごとに教員の採点のしやすさに関する感覚の差異（点のバラツキの大きさ）もあることから、採点のしやすさについては一律の採点のしやすさ（平均）を見るよりも、採点のしやすさに関する感覚差異に注目し原因を探っていく必要がある。2018 年の調査で評価のズレが大きく、また追加調査（2020 年）の採点のしやすさにおいて最も点数が低かった（3.3 点）のは「背景説明 2」に該当する項目であった。記述を見てみると「この問題を扱う価値」や、「論点が広すぎる」といった、論点の絞り込みの程度に触れる記述がある。また、追加調査の自由記述で採点しにくい点として、「広すぎる」という観点のみで「狭すぎる」「論点がない／わかりにくい」という印象のときにつけられないという回答があった。また、採点の困難点に関する自由記述では、ルーブリックの文言の曖昧さ、学生の具体記述部分とルーブリック該当箇所との照会のしにくさ（学生自身が照会できない）、構成の厳密なチェックの必要性などが挙げられた。

調査結果 A・調査結果 B を元にしたルーブリックを改善し、初年次教育における授業（受講者約 2,000 名）において改訂版ルーブリックを用いた実践を行った。ルーブリック改善経緯と具体的な記述について藤浦（2020）にまとめた。

(C)　学生の評価・コメント傾向

評価表の具体記述（具体的な記述方法としては、評価該当箇所の有無による大幅減点項目の設置など）により「点数なし」など、極端な点数差による評価のバラつきは軽減できることがわかった。一方で、非ルーブリック型・ルーブリック型どちらにも評価のバラつきは存在し、評価のバラつきを評価記述により完全に解消することは難しい。また、本調査から、評価表に記載されているレポートで使用する表現を採点の手がかりとしていることも窺えた。一方で、表現のみに手がかりを求める学習者は、表現のみで判断し高得点をつける可能性もあることから、表現以外の観点を意識させることも必要であることがわかった。

次に、アドバイスについては、「表現・形式」や「内容」についてのアドバイスは多くの学習者が目を向けるところであることが示唆された。それらの問題点を「指摘」することは多く行なっているが、学習者同士のアドバイスにおいてアドバイスの受容度を高める「箇所指定」や「具体提案」は少なかった。また、「構成」や「資料」については言及されづらい傾向にあった。

教員側からの「A さんのレポートについて、読んでいて感じた疑問点やもっと知りたいと感じたことを書いてください」という指示と、「A さんのレポートをより良くするためにアドバイスをお願いします」という指示の 2 種類の指示に対する記述傾向を調べると、前者は内容に関するコメントが、後者は形式に関するコメントが多く、教員の指示により学生のコメント傾向が異なることがわかった（藤浦・宇野 2023）。

以上、の知見は以下の三点にまとめられる。

(1) 評価差異は、形式面よりも内容面の方が大きいが、具体的記述により評価差異を小さくすることが可能である。また評価差異は完全には解消できないものの、高得点のレポートほど評価差異は少なく、「一定以上できている」という基準は、言語化できない段階から多くの採点者が持っており、ルーブリック作成時には、複数評価者で複数の成果物を評価する等の作業を通して言語化することが必要である。

(2) 評価表の記述には、記述が抽象的で程度の判断に迷う記述だけでなく、「該当するものがない」という問題もある。また、教員が評価時に判断したレポートの記述箇所について、評価を受け取った学生がその部分を参照できていないという問題も明らかになった。よって評価表の該当箇所がレポートのどこを指すのかを明示する工夫が必要である。

(3) 学生同士が評価表を活用しながら相互にアドバイスを行う際は、表現形式や内容についてのアドバイスは多く行うものの、そのアドバイスがどこを指すのか明示する「箇所指定」

や、どのように改善すると良いと思うかという「具体提案」は少ない傾向になった。また、言及そのものについては、レポートの構成や資料についての言及が少なく、相互チェックの際に教員が補足する必要がある。また、教員の指示により学生のアドバイスコメントが内容に言及されるか、形式に言及されるか異なることが明らかになった。教員は「相互にコメントしてください」というような抽象的な指示では不十分であり、どのような点を検討させたいかにより、指示の仕方を使い分ける必要がある。

文科省（令和 2 年度）の調査によると、本調査開始時直近の調査（平成 28 年度）は、学部段階において一部の科目をルーブリックにより明示している大学は僅か 16%であったが、令和 2 年度の調査では 30%と約倍増しており、今後も多くの現場で開発・活用が期待される評価ツールであると言える。一方で、活用現場が劇的に増えているわけではない。この状況については、ルーブリック作成の難易度の高さも一因として考えられる。ルーブリック作成は、各現場の目標、成果物に合わせて記述を作成・整理する必要があり、より良いルーブリック作成のためには現場教員のコミュニケーション、学生の成果物の検証に多くの時間がかかる。本研究結果は、約 2,000 名の受講者を対象とした大型カリキュラムにおけるルーブリックの改善過程と改訂版ルーブリックの評価傾向を調査した点において、多くの高等教育現場への活用が期待できる。

また、上記の調査、改善のための実践を通して、より良い科目運営のためには、唯一の評価表を作成することを目的化するのではなく、履修人数や授業形態など絶えず変化するカリキュラム状況、学生の成果物や授業ない行動の観察及び分析を行い、教員間の評価に関する話し合いや改善の場を設けることが重要であることがわかった。初年次教育に関わるカリキュラム運営において、どのように教員間でコミュニケーションを取りながら改善を重ねてきたか、それぞれの教員が学生の困りごとにどのような対応をとってきたか、カリキュラム運営全体で得られた知見や示唆を、現場ですぐに活用できるよう、具体的な事例をふまえて取りまとめた（藤浦 2023）。

今回の調査で改善した評価表については、多くの現場において対話・調査・改善を重ねながらより良い評価表を作成できるよう、編集可能なファイル形式にて公開した（藤浦 2023）。これにより、本研究のルーブリック改善プロセスや教員・学生の評価表活用プロセスを参照しながら各現場に合わせた検討が可能になり、評価表作成の負担軽減及び効果的な活用が期待できる。

＜引用文献＞

① 宇野聖子・藤浦五月（2016）『大学生のための表現力トレーニング あしか アイデアをもって社会について考える（レポート・論文編）』 ココ出版

② 藤浦五月・宇野聖子・小針奈津美・坂井菜緒・柴田幸子・服部真子・中川純子・長松谷有紀（2018）「初年次レポート・ライティング教育における共通ルーブリック使用時の評価のズレに関する研究：評価の公平性確保と効果的なカリキュラム構築に向けて」『しあわせ研究所紀要』1，3-24.

③ 藤浦五月（2021）「初年次レポート・ライティングプログラムにおけるルーブリックの改善」『グローバルスタディーズ』5，125-146.

④ 藤浦五月・宇野聖子（2022）「評価項目の記述が他者評価活動に与える影響：評価表とアドバイスコメント：評価表とアドバイスコメントの関連性」『グローバルスタディーズ』7，97-120.

⑤ 藤浦五月（2023）『レポート指導のトリセツ：学生つまずくポイントを徹底解説』ナカニシヤ出版.

⑥ 藤浦五月・宇野聖子（2023）「レポート評価活動における教師の指示が学生のコメント記述に与える影響」『日本教育工学会研究報告集』2023 巻 1 号.

⑦ 文部科学省「令和 2 年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」https://www.mext.go.jp/content/20230117-mxt_daigakuc01-000025974_1r.pdf（参照 2023-05-01）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 藤浦五月・宇野聖子	４．巻 2023
２．論文標題 レポート評価活動における教師の指示が学生のコメント記述に与える影響	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本教育工学会研究報告集	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤浦五月・宇野聖子	４．巻 7
２．論文標題 評価項目の記述が他者評価活動に与える影響：評価表とアドバイスコメントの関連性	５．発行年 2022年
３．雑誌名 グローバルスタディーズ	６．最初と最後の頁 97-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤浦五月	４．巻 5
２．論文標題 初年次レポート・ライティングプログラムにおけるルーブリックの改善	５．発行年 2021年
３．雑誌名 グローバルスタディーズ	６．最初と最後の頁 125-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤浦五月・宇野聖子・村澤慶昭	４．巻 2
２．論文標題 学生の文章特性と意識調査から自律学習を促す効果的な指導について考える ： 初年次レポート・ライティング指導における実践をもとに	５．発行年 2019年
３．雑誌名 武蔵野大学しあわせ研究所紀要	６．最初と最後の頁 29-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤浦五月・宇野聖子・小針奈津美・坂井菜緒・柴田幸子・服部真子・中川純子・長松谷有紀	４．巻 1
２．論文標題 初年次レポート・ライティング教育における共通ルーブリック使用時の評価のズレに関する研究	５．発行年 2018年
３．雑誌名 しあわせ研究所紀要	６．最初と最後の頁 3-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 藤浦 五月，宇野 聖子，小熊 貞子，桑野 幸子，佐々木 馨
２．発表標題 学生のテキスト理解を把握するための要約分析―アウトプットにつなげる読解力養成の教材開発を目指して―
３．学会等名 日本語教育方法研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 藤浦五月・宇野聖子・桑野幸子
２．発表標題 「話し合ってよかった！」を育むためのディスカッション教材開発:―アイデア積み上げ過程を評価するには
３．学会等名 JLEM
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤浦五月、宇野聖子、村澤慶昭
２．発表標題 全学初年次レポート・ライティング教育実践を通して明らかとなった学生が抱える困難と今後の可能性―「日本語リテラシー」を介した学科間連携教育プログラムの開発に向けて
３．学会等名 Happiness Meeting
４．発表年 2018年

１．発表者名 藤浦五月、宇野聖子、村澤慶昭
２．発表標題 自律学習を促すレポート・ライティング指導と教育の質保証について：学生の文章特性から教員の指導と自律学習支援システムとの連携を考える
３．学会等名 初年次教育学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 藤浦　五月	４．発行年 2023年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 140
３．書名 レポート指導のトリセツ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	宇野　聖子 (UNO SEIKO)	京都大学・国際高等教育院・非常勤講師 (14301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関